

# ORANGE



桑山玉洲《秋景山水図》

## 作品紹介 桑山玉洲《秋景山水図》

賛・獨向山中訪隱君行窮千澗水沄々仙家更在／空青外只許人間禮白雲虞集句此畫／友／桑明夫所寫筆墨絶妙可謂精熟也偶無／款識需于余之題字妄書之以還云／戊寅夏四月廿九日 介石山人

桑山玉洲は池大雅や木村兼霞堂などの師や画友、文化人たちと、親交を深めるとともに絵画表現や研究を続けるうえで多くの事を学びました。特に「歳年下で同郷の野呂介石とは生涯親しく交流を続け、寛政五(一七九三)年には紀伊藩医師の今井元方と同じく紀伊藩士の

小田仲卿、そして介石の四人で熊野各地を旅行し、この旅で得た感動をもとに一人とも多くの画を作成しています。また、介石の居宅を玉洲が描いたり、二人で合作の双幅を描くなど互いに刺激しあう存在であり、特に玉洲の画に介石が賛を加えた作品が多くのごつています。本図は友人の依頼で玉洲の没後一九年目の文政元(一八二〇)年に介石が虞集の詩を題して識語とし、後半に玉洲の画に対する賛を加えたもので、玉洲と介石の交友の深さがうかがえる興味深い作品です。

(主任 辰巳 充)



新しい絵はがき6点です

すので、ご希望の方は早い目にお求めください。なお郵送での販売にも対応していますので、お気軽にお問い合わせください。

※文中の価格はすべて消費税込みの金額です。(主査 大江 史)

## 新しい絵はがきと図録販売価格改定のご案内

当館では、絵はがき、アートファイルなどのオリジナルのグッズや、過去の展示会の図録、所蔵品目録などを販売しています。この春から販売品に新しい絵はがき6点を追加し、一部の図録などの価格を改定しましたので、ここに紹介します。

写真を掲載しているのが新しく加わった絵はがきです。上段左から、桑山玉洲《雪山唸客図》、麻田鷹司《那智E》、玉村方久斗《鶴之図》、下段左から、浅井忠《諏訪風景》、大下藤次郎《秋の海(小豆島)》、入江波光《杏咲く頃》です。近年収集した作品や、人気の高い所蔵品・寄託品から厳選した6点ですので、一度手にとってご覧いただけたらと思います。

絵はがきについては、お徳な作家ごとのセットや、文人画のセットも販売していますので、お買い求めの際には是非そちらもご検討ください。

また今年の4月1日から、発行後5年以上経過した刊行物について販売価格を値下げすることとしました。中西利雄展(平成15年度)、山本丘人展(平成21年度)などの図録を2057円から756円に、桑山玉洲展(平成13年度)、小林和作展(平成17年度)、画家とパレット(平成24年度)などの図録を1029円から540円にしています。他にも、所蔵品目録を1543円から540円に、原勝二郎のフランス放浪日記を1852円から756円にするなど、発行から5年以上経過したものすべてについて大幅な価格の改定をしていますので、この機会にお手元においていただけたらと思います。在庫が僅かのものもありま

## 絵画と出会う「この一点!」

### 稗田一穂と戦後の日本画

会場：田辺市立美術館

会期：平成30年2月10日(土)～3月25日(日)

「伝統とは後から体系づけるものであって、日本画も近代感覚の中に生きねば一島国のエキゾチズムのローカルアートに葬り去られる時が来るであろう。」これは稗田一穂(1920～)が1952(昭和27)年に、美術雑誌のアンケートに答えて記した言葉である。ここに書かれた日本画の表現に対する危機感は、当時の少なくない画家たちが共有していたものであろう。稗田はその言葉通り、同時代の表現と感覚を吸収しながら、果敢に新しい日本画の世界を切り拓いていった。

図版の《荒原》もその時期の代表的な作品である。日本画の記号的な表現にキュビズムから得たモチーフの平面化と形態の再構成を取り入れて、異国風の広渺たる風景を力強い画面に構成している。従来になかった表現だが、日本画の画材と技法で描かれることの不自然さはなく、こうした作品によって、その可能性が示されていった。

(学芸員 三谷 渉)



稗田一穂《荒原》 1956(昭和31年) 田辺市立美術館蔵



熊野古道なかへち美術館でのギャラリートーク

(写真家 内山 りゅう)

## 編集後記

この春の人事異動で、私が美術館に!と驚いてから半年が経ちました。初めての編集担当で発行する今号のORANGEですが、いかがでしたでしょうか。至らないことばかりではないかと心配ですが、これからも精一杯頑張ります。よろしくお願いたします。

(担当F.O.)



紙園南海《五老峰図》 田辺市立美術館蔵



野呂介石《夏景色山水図》 文化9(1892)年 田辺市立美術館蔵



桑山玉洲《玉津嶋奥窟図》 田辺市立美術館蔵

## ORANGE Vol.27 付録

### 文人箋三二

当館では、所蔵品の野呂介石《青緑梅林山水図》の図版を使用したB6サイズの便箋、「文人箋」(一冊360円で、作品全体をあしらったものと、満開の梅花の一枝をそえたものとの二種類が各10枚綴じられています)を5年前から販売してご好評をいただいています。

この文人箋を小さくした、一言メッセージ用の便箋「文人箋ミニ」を今号のORANGEの付録としてお届けします。点線に沿って切り離してご利用ください。

ちょっとしたプレゼントを贈るときに添えたり、借りたものを返すときに御礼の一言を記したり、様々なシーンでお使いいただけるのではないかと考えています。

## 田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.27

編集・発行：田辺市立美術館 / 熊野古道なかへち美術館

発行年月日：平成29年10月1日

### 田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43  
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771  
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

### 田辺市立美術館分館 熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891  
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393  
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

## シリーズ『現代の織』

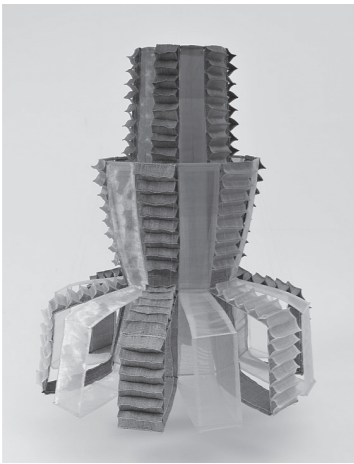
田辺市立美術館では、当市の出身で日本におけるタピスリー表現の第一人者として活躍している潮隆雄（1938～ ）の芸術を伝える展覧会を、『Tapestry 潮隆雄展』（平成9年度）、『潮隆雄タピスリー近作展 1990～2010』（平成22年度）の二度開催し、その活動の背景となっている日本の近現代の工芸の動向についても、『前進する工芸』（平成16年度）、『近代工芸の巨匠たち』（平成25年度）の二つの展覧会を開催して紹介に努めてきました。

これらの展覧会を通してうかがうことのできた、織による造形に取り組む日本の作家の高度で独創的な表現を、より広範に充実した内容で伝えることを考えて、現代の代表的な織作家の制作を特集して展観するシリーズ、『現代の織』を今年度からスタートします。

糸を織ることから生まれる、独特で多様な質感と色彩は、古くから実用的な織物の域で用いられるだけでなく、視覚にうったえる表現手段としても洗練を重ねてきました。西洋におけるタピスリーの制作がその代表的なものです。1960年代の後半頃からは、絵画



潮隆雄「深熊野神韻」 2016年



久保田繁雄「Shape of Red I」 2009年

## 連続講座『森と芸術』

熊野古道なかへち美術館では、立地する「熊野」がたたえる魅力の根幹をなすキーワードとして「森」をとらえ、これまで「森の中で」（平成19年度）、『森の記憶 熊澤明子テキスタイルの世界』（平成22年度）などの展覧会や、『森の響き—種谷睦子マリンコンサート』（平成22年度）、『かみ・カミ・紙 谷内つねおとつくる—紙の虫・カミの森』（平成28年度）などの催しを重ねてきました。

木々が深く生い茂る「森」は、多彩な生き物が息つき、土、水、風、音も含めて、日々変化し続けています。また「杜」とも記されるように古くから人々は「森」を神々が棲み、顕れる場とも考えてきました。このような神秘的な魅力を持つ「森」は、芸術創造の源ともなります。ここ「熊野の森」も例外ではありません。

熊野古道なかへち美術館が来年10月に開館20周年を迎えるにあたって、改めて「森と芸術」の関係を探る機会をつくり、「森」の有する自然や歴史が、現在とこれからの芸術に与える可能性を考えることをねらって連続講座「森と芸術」を来年3月に開催します。

「森」と関連の深い作品を発表している芸術家を講師に招いて、自身の制作とそれを通して考える森の魅力について話をうかがいます。広い視野から「森と芸術」の関係をとらえるために、「美術」、

的な表現を越えて、織りによる立体的な造形表現を試みる作家が世界各地で多数現われ、「ソフトスカルプチュア」や「ファイバーワーク」といった言葉も生まれました。織りによる表現は、現在もなお新たな素材、技法を取り込み、時代を反映しながら豊かに展開し続けています。

日本においても伝統的なものと独自のものを、素材と技法において運動させ、駆使し、織りの造形表現を刷新している作家が少なからずいます。『現代の織』では、西洋のタピスリー制作の伝統を現代の日本に展開する作家、またそれを超えて新しい織りの造形表現を追求している日本の作家を中心に紹介してゆきたいと思います。

初年度は、独自の技法を駆使してタピスリーの表現を深め続けている潮隆雄と、日本のファイバーワークの先駆的な作家で、国際的に活躍する久保田繁雄（1947～ ）の制作を取り上げます。

（学芸員 三谷 渉）

## INFORMATION

### 特別展 現代の織Ⅰ 潮隆雄

会 場／田辺市立美術館

観覧料／600円(480円)

学生及び18歳未満の方は無料

※( )内は20名様以上の団体割引料金です。

○展示解説会 11月11日(土)午後2時から

当館学芸員が行います。

### 特別展 現代の織Ⅱ 久保田繁雄

会 場／熊野古道なかへち美術館

観覧料／400円(200円)

学生及び18歳未満の方は無料

※( )内は20名様以上の団体割引料金です。

○ギャラリートーク 10月28日(土)午後2時から

久保田繁雄が行います。

会 期／平成29年10月14日(土)～11月19日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日／毎週月曜日

●「関西文化の日」11月18日(土)は観覧料を無料にします。

「音楽」、「文学」の分野にわたって各1回、計3回の連続講座とすることを計画しています。この企画は田辺市立図書館とも連携して行い、「文学」の分野については図書館を会場とします。

普段から美術館に来られている方々ばかりではなく、広く「森」や「芸術」に関心を寄せられる方々に参加していただいで、芸術家とともに、これからのこの地と芸術について考えていただければと思っています。

（学芸員 知野 季里穂）

## INFORMATION

### 連続講座 森と芸術

会 場／美術—田辺市立美術館

音楽—熊野古道なかへち美術館

文学—田辺市立図書館

主 催／田辺市立美術館・田辺市立図書館

※平成30年3月の土曜日・3日間を予定しています。

## REPORT

### 特別展「熊谷守一 —書と絵と肖像—」

4月22日(土)～7月2日(日)

- 記念講演会「熊谷守一先生を撮影した3年間」
- レクチャーコンサート「熊谷守一と画家・音楽家との交流」

類ない「モリカズ様式」とも呼ばれる造形によって、今日も多くの人々を魅了し続けている洋画家、熊谷守一（1880～1977）の没後40年を機に、その芸術を振り返る特別展を今年度の最初に開催しました。

この展覧会は、熊谷の芸術の根底にあるその人物の魅力を伝えることも趣旨の一つとしていました。そのため、熊谷の人柄がよく伝わる書や日本画の作品についても重点をおいて展示を構成し、加えて写真家、藤森武が撮影した最晩年の肖像写真およそ20点を特別に展観しました。

会期前半の5月6日に、その撮影を通じて熊谷と心を通わせた、藤森さんをお招きして講演会を開催しました。藤森さんは、3年間足しげく自宅に通って熊谷と間近に接した体験を、ユーモアも交えながら話され、そこからうかがえた熊谷の「人」について深い敬意をもって語ってくれました。

会期が後半に入った6月10日には、熊谷と芸術家たちとの交流をうかがうレクチャーコンサートを行いました。若き日の熊谷の画家仲間や音楽家との交友を軸に解説を行い、ヴァイオリニストの松田淳一さんとピアニストの松田淳子さんのご協力によって、熊谷と生涯にわたって親交を結んだ作曲家、信時潔の楽曲や、熊谷が作曲した音楽、愛奏していた名曲など（熊谷は若い頃の一時期ヴァイオリンやチェロの演奏に熱中していました）を実演していただきました。

また、会期中の前半と後半に一回ずつ展示解説会も実施しました。

いずれの催しにも大勢の方が参加してくださり、展覧会もたいへん盛況でした。熊谷守一の作品とともに、その生き方にも共感される方が多いことを改めて実感しました。

（学芸員 三谷 渉）

### 特別展「自然を追い求める —写すこと、想うこと—」

7月22日(土)～9月24日(日)

- 公開対談 萩原博光×飯沢耕太郎
- 内山りゅう ギャラリートーク

今年の7月から9月にかけて南方熊楠の生誕150年を記念した特別展「自然を追い求める—写すこと、想うこと—南方熊楠・雑賀清子・内山りゅう」を、田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館の二会場で開催しました。その内容は南方が最晩年まで精力を傾けて作成した菌類(きのこ)図譜と、南方と同じようにこの地の自然に深い親しみを持ってその姿を探究し、制作へと結びつけた現代の画家、雑賀清子の植物スケッチ、同じく現代の写真家、内山りゅうの淡水写真を展観し、自然を観察して写すことから世界へと想いを馳せた学者、芸術家の姿を紹介するものでした。

会期中には、展覧会の内容により深く関心をもっていただくための2つのイベントを開催しました。南方熊楠の菌類図譜を展示した田辺市立美術館では、9月2日に国立科学博物館名誉研究員の萩原博光さんと写真評論家できのこ文学研究家の飯沢耕太郎さんをお招きして、公開対談を行いました。南方の菌類図譜の整理・調査に当初から携わって来られた萩原さんと、文化史的視点からきのこを研究されている飯沢さんによる対談は、南方の菌類図譜についての話から始まり、それを通して見えてくる南方の人物像や、南方が最晩年まで図譜の作成に精力を傾けた「きのこ」というものについてなど、対談はスリリングに展開しました。既定の概念に捉われない南方の思考のように、ジャンルを横断した刺激的な内容の対談でした。

内山りゅうの淡水写真で構成された熊野古道なかへち美術館の展示室では、8月19日と9月9日の二回、作家本人によるギャラリートークを行いました。テーマにしている「淡水」について、またその撮影にまつわる様々をたっぷり1時間、作品の前で話していただけました。詳しくは今号の「田辺市立美術館へのきもち」にご寄稿をいただいていますので、一読いただければと思います。

この展覧会は作品をよすがに、そこに反映しているそれぞれの作家の、世界についての深い思索に触れていただくことがねらいでした。そもう一つ、私たちを取り囲む自然に改めて目と意識を向け、その中で生きることについて想いを巡らせていただくことも目指していました。

その一助となるよう、会場でワークシートを配布する試みを行いました。ワークシートは、はじめに展示を観て気に入った作品をスケッチし、その作家がどんなことを考えながら自然を写したのか想像したことを書き、その後美術館の外に出て、自分でも自然を観察してスケッチをしながら、思ったこと考えたことを記すという内容のものでした。

夏休みの期間ということもあってか、予想以上の多くの方々に取り組んでいただけました。じっくりと自然に向き合ったと思われる方、こちらの思ってもいなかったユニークな視点から自然を観察している方など、ワークシートには様々な自然へのまなざしが記されました。

展覧会は終了しましたが、私たちをめぐる自然を観察し、そこから少し想いを馳せてみることを重ねていただけたら何よりのことと思っています。

（学芸員 知野 季里穂）



自身の撮影した写真をもとに最晩年の熊谷守一の思い出を話される藤森武さん



熊谷守一の愛奏曲を演奏する松田淳一さん(Vn)と松田淳子さん(P)



南方熊楠ときのこをめぐって交わされた対談



会場に掲示されたワークシートを見て話し合う方々

今回の付録、「文人箋ミニ」に使用している図版の3点は江戸時代に「紀州の三大文人画家」と呼ばれて活躍した、祇園南海、野呂介石、桑山玉洲の作品です。

南海の《五老峰図》は中国の文人画を模写した作品で、賛には李白の詩が書かれています。介石の《夏景山水図》は山水画独特の技法が多く見られる作品で、自作の詩が賛として記されています。玉洲の《玉津島輿崑図》は和歌浦の玉津島神社周辺を実景に即して描いた作品で、真景図と呼ばれるものです。

どの作品も中国文化への憧れから生み出された、この時代を象徴する文人画の表現で描かれています。

## INFORMATION

### 館蔵品展「南画の絵と書」

会期：平成29年12月2日(土)～平成30年1月28日(日)

会場：田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館